

## 竹島の展示がある博物館

— 隠岐郷土館を訪ねて —

野 口 剛\*

2008年7月、今回改定された中学校学習指導要領の社会科解説書をめぐって、竹島の存在が俄かに注目されることとなった。とはいえ、東京などで生活する者にとっては、やはり観念上の問題という性格が強く、どこか遠い世界のことのように感じられているのが現状だろう。しかし、これが竹島に最も近いというよりは、行政区画の上では竹島を管轄する隠岐に行くといささかその様相は違ってくる。まず、鳥取県の境港や島根県の七類港とを結ぶフェリーが発着する島後の西郷港の建物には「かえれ！竹島」と書かれた看板が掲げられ、建物の外に出ると「竹島！かえれ島と海」という立て看板もある（写真1・2）。



写真1 隠岐西郷港に掲げられた看板



写真2 西郷港前の道路に立つ看板

隠岐は離島とはいえ古代より四つの郡からなる律令制度下の一国であり、国造も存在している一つの文化的なまとまりを持った地域であった。その中の最大の島である島後は5～600m級の山々を境にして周吉郡と隠地郡とに分かれており、竹島の行政上の地区名はこの隠地郡五箇村竹島というものである。現在は町村合併などにより島根県隠岐郡隠岐の島町となったが、その所管はそのまま引き継がれている。

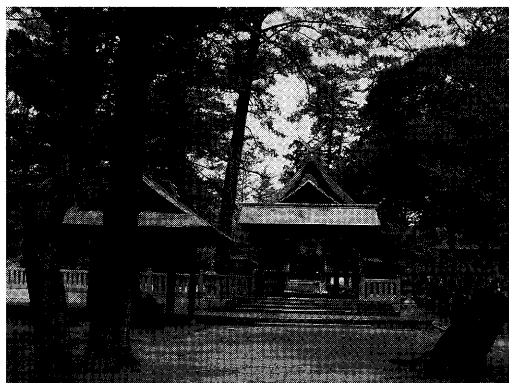


写真3 水若酢神社社殿

そして、この島後にある博物館が隠岐郷土館である。この博物館は、延喜式にも記されている隠岐国一宮の水若酢神社（写真3）の裏手にある。この神社の社殿自体も隠岐造と呼ばれる傾斜の強い屋根をもつ建築であり、境内には隠岐最大の横穴式古墳も存在するなどこの地域の文化を知るにはたいへん貴重なものである。博物館の建物も、明治18年に隠岐の四郡、すなわち周吉・隠地・知夫・海士の合同の郡役所として立てられたものであり、島根県では最も古い洋風建築として文化財に指定されている（写真4）。そして、もちろん、ここは郷土館の名前が示すとおり、隠岐の主産業である漁撈のほか、農業・畜産業・山林業

\* 筑波大学附属高等学校



写真4 隠岐郷土館の建物

などで使われた道具類、あるいは島の生活で用いられた日常用具を展示することを基本的な目的にしている。しかし、この郷土館が他ではまねのできない独自性を持つのは、決して大きなスペースをとっているわけではないにしろ、ここに「竹島関係展示コーナー」というものが存在していることである。この島後の北部に位置している久見の港は、かつて竹島での漁に出かけてゆく出発地もあった。したがって、ここには竹島で実際に漁をした経験を持つ者も住んでいる。竹島に関連したいろいろなものが残っているのもこの地域である。そして、この郷土館では、隠岐の生活のそういった歴史に思いを致すために、かつて竹島で行っていた漁業の様子を撮影した写真や実際に使っていた漁具、さらには竹島から運んできた石

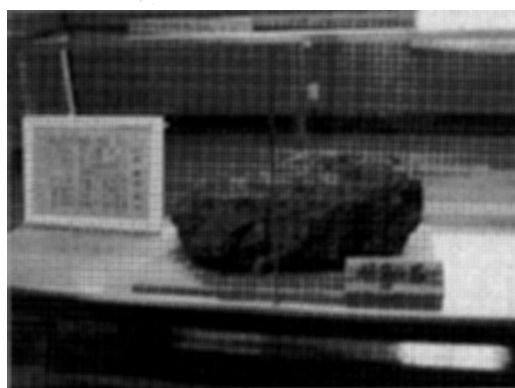


写真5 竹島の石

(写真5)などを展示しているのである。また、ここが日本と韓国の間でどういった経緯で現在に至っているのかを解説した年表を掲示し、こうした現状に対する地元の漁民の声を紹介(写

真6)したり、島根県で作成した解説ビデオテープなども流している。こうした展示や解説を見ると、隠岐という土地には、本土とは違った「もう一つの日本」があるという思いにさせられるのである。



写真6 竹島での漁業の様子と地元の声

竹島の問題に限らず、国とか主権という言葉が絡んでくると、すぐに建前論に終始したり感情的な対立となってしまう傾向というものはこの国の人間にもあるであろう。この郷土館にある竹島関係の展示や解説は、もちろん竹島での漁業の再開を願い原状の回復を希求する地元の住民の声を反映するものである。したがって、日韓交渉の最中に警備隊を上陸させて今にいたるまで占拠を続けている韓国のやり方を批判し日本側が行ってきたこれまでの主張は十分に根拠があるとするものではある。しかし、同時にそれは一方的に相手側の非を糾弾するというより、お互いの話し合いを呼びかけ、竹島周辺における漁業の再開を願い、なかなか真剣に交渉に取り組もうとしない日本政府への失望など、いたって静かなトーンで貫かれているところに特徴があるといえよう。

今日、世界のグローバル化が唱えられる一方で、国境や主権といった問題はきわめて現実的なものとして世界中に存在し続けている。そして、こういった問題に対してわれわれが社会科教育という立場から関わろうとする場合、まず必要なことは何であろうか。日本の場合、陸上の国境線を持たないがために、この種の議論はどうしても

抽象的に傾きがちである。しかし、それであるからこそ、そこをいきなり国家主権の問題という抽象論から入らずに、現場においてはかつてどういった人々の生活の営みがなされていたのかというところから出発することこそが、極めて大事

なのではないかと思われる。そうした現場の持つ具体性の中にこそ、本当の問題解決の端緒というようなものが潜んでいるのではないだろうか。隠岐郷土館の竹島の展示はそうした思いに見る人をいざなう性格を持ったものである。